

# 『幾何学の起源』序説』再読

## On Husserl's "Origin of Geometry"

加 藤 恵 介

キーワード：現象学、イデア性、幾何学

デリダは、1967年に刊行された『声と現象』において、現象学の「脱構築」に着手する。その議論の柱となっているものの一つは、反復によるイデア性の構成と、そこに働く広義の「文字」的なもの、すなわちエクリチュールである。彼が後年振り返って語るように、彼がエクリチュールの概念を着想したのはフッサールの『幾何学の起源』からであり（SP21/30）、この問題系にはすでに「発生と構造」と現象学で触れられているが、それが本格的に展開されるのは1962年の彼の『幾何学の起源』翻訳に付された「序説」においてである。ベルネットによれば、『声と現象』の議論の一つは、この「序説」における「イデアの対象の現前についての分析」を、「語を用いてなされる思考の表現」に適用するものである<sup>1)</sup>。反復によるイデアの対象の歴史的構成を、表現の意味のうちに持ち込むことによって、超越論的、形相的還元を経た意味のうちに、還元されえない歴史性、問主観性、物質性が導入される。ここでは、『声と現象』の議論との関連から、『幾何学の起源』の「序説」を再読する。

### 1 幾何学の起源

『危機』書と関連する遺稿である『幾何学の起源』において、フッサールは再活性化されるべき「幾何学の根源的な意味」（OG173/258）あるいは「幾何学の意味の起源」（174/259）を問う。それは「意味の最も深い問題」すなわち「科学および科学史一般」さらに「普遍的歴史一般」の問題に導く範例的な意味をもつ（174/258）。しかしそれは事実に関する「文献的歴史的問い」（175/259）ではない。幾何学は「成果から成果へ」の「認識の進歩」として進行しつつ、そこでは「いっさいの成果が妥当し続け、すべてが一つの全体をなして、そのつどの現在に全成果が次の段階の成果にとっての前提の総体をなすような」「連続的な総合」（177/262）である。そのようなものとして幾何学は「一つの起源」「一つの歴史的始まりを持っていた」（178/263）はずではあるが、それに関する歴史的事実が問題なのではなく、単なる事実を還元して、幾何学の「先-創設的」なものとして必然的にそうでなければならなかった始源」（175/260）、本質的、必然的な意味の発展の連鎖、普

遍的な「歴史的アプリオリ」(205/294)が問われねばならない。これに対してデリダは、『フッサール哲学における発生の問題』においては、歴史のイデア的な意味に留まり現実の歴史的発生を排除するものとして批判していたが、ここではこの批判は影を潜めている。

幾何学の前段階として「より原初的な意味形成」が先行していたはずであり、それは発見者にとって明証性、つまり「存在者の現存」の意識への根源的現前をもっていたはずである(178/263)。この「本源的に現存する意味」は、「純粹に発見者の主観の中」「彼の精神的空間の中」にある(178/264)。しかし他方で幾何学的存在は心的存在ではなく、誰にとっても普遍的、客観的に妥当する、「独自の超時間的な現存」「イデア的客観性」(179/264)をもっており、「ただ一度しか存在せず」、どのような表現においても「同一のもの」である(179/265)。すると問題は、「そもそも幾何学のイデア性は(すべての科学のそれと同じように)、最初の創建者の心の意識空間内の形象であったその人格内部的な起源的発生からいかにしてそのイデア的客観性にたどり着くのだろうか」(181/266)ということである。

つまり、主観にとっての明証性しかもたない意味が、いかにして普遍的なイデア的客観性に至るのか、という問題であり、このプロセスはフッサールによれば「言語によって」(181/266)可能になる。このプロセスに立ち入る前に、イデア的客観性の分類についての、フッサールとデリダの異同について見ておきたい。

## 2 いくつかの異同

デリダはイデア的客観性を三つの段階に区分している。しかし、フッサール自身は、言語のもつイデア的客観性と幾何学的対象のイデア的客観性を区別しているが、デリダのように明確に三つに分類している訳ではなく、デリダはフッサールが『経験と判断』で述べた「縛られたイデア性」と「自由なイデア性」の区別を援用して、この区別を行っている。

まずフッサールによれば、幾何学的存在は「どのような人」にとっても「客観的に現存するものの存在」であり、「すべての人間」にとって「接近可能」な「独自の超時間的現存」をもち、「イデア的」客観性をもつ。「この客観性は、すべての科学的形象および諸科学自体を含め、しかもまたたとえば文芸的形象をも含む文化世界の精神的産物に固有なものである」(179/264)。これは、いかなる言語で表現されようとも、ただ一度しか存在せず、原語においても翻訳においても同一である。

他方で「言語それ自体」もまた、「イデア的客観性」から築き上げられている(180/265)。しかし言語的形象としての「幾何学の用語や命題や理論」のイデア性は、「幾何学において言表されたものや真理として妥当させられたもの」すなわち「イデア的な幾何学的対象、事態など」のイデア性ではない。(180/266)これは、言表の主題と言表それ自体との区別である。ここで主題とされるイデア的客観性は「言語という概念に従属するイデア的客観性」とは「まったく異なる」。このように、フッサールは、言語に従属するイデア性と、言語に従属しない、それ自体イデア的である幾何学的対象のイデア性とを区別している。

すると、幾何学的対象のイデア性は、言語のイデア性とはまったく異質な、別の領域に属するも

のなのだろうか。それとも、幾何学的真理が言表される時、言表それ自体のイデア性と、言表される対象のイデア性という、二つの次元が機能的に区別される、ということの意味なのだろうか。幾何学的対象のイデア的客観性は、「文芸的形象をも含む文化世界の精神的産物」一般のうちに含まれており、するとそこには言語のイデア性に従属するものも含まれるはずである。また後に見るように、この言語に従属しない、幾何学的対象のイデア性は、にもかかわらず、言語を介してしか構成され得ないのである。すると、言語に従属するイデア性と、そうでないものの境界線は、あらためて問題にされる必要があるだろう。

これに対して、デリダは、イデア性を三段階に区分している。

まず最初に、言語の備えるイデア性があり、イデア的形成物は「言語活動一般のなかにのみ根ざしている」(57/90)。語はイデア的客観性および同一性を持っており、音声的あるいは表記的な経験の物質化とは混同されず(58/91)、「語る主体、語、指示される事象の事実的実在(実存)の自ずからの中性化」を前提する(58/92)。これは、形相的還元を経たものと考えられる。

(現象学的還元は形相的還元と超越論的還元という二つの局面からなる。デリダはここで言語を形相的還元を経たものと見なすが、超越論的還元を経たものと見なすのかについて、疑問を呈している。ここにも、フッサールとデリダの異同が見られる。

フッサールは『現象学の理念』において「言語の水準のみにおいて働いている思考」は、「必然的に現象学的還元の態度の中に」あり、「意味と純粹体験の形相的世界の中に」と述べている。つまり、言語を、形相的還元と超越論的還元からなる現象学的還元を経たものと見なしているのだが、デリダは形相的還元について認めながら、超越論的還元については困難を見ている。「なぜなら、現象学的還元がそのまったき意味を持つとしたら、それはまた構成された形相学とそれゆえ自分自身の言語活動の還元でもなければならぬからである」(59/92)。つまりここで、デリダは言語活動のイデア性を、形相的還元を経たものとみなしながら、超越論的還元を経たものとみなすことは困難としている。それは、現象学的還元を行う哲学者自身の言語活動それ自体の現実存在を還元することには困難が伴うだろうからである。ここで彼は単に対象として論じられた言語だけではなく、言語を対象とする現象学的分析の言語自体を問題に含めており、いわば対象言語とメタ言語の双方を問題にしているのである。しかし、デリダはこの論点をそれ以上展開していないように見える。後の『声と現象』において、言語は形相的のみならず超越論的還元を経たものと見なされている。)

しかし、語のイデア的客観性は相対的で「縛られた」ものである。たとえば Löwe という名詞がイデア的なのは、「事実的歴史的言語の内部」においてのみであり、ドイツ語の単語として、実在的な空間時間性に縛られ、所与の言語の事実存在と、それを語る共同体の事実的主観性とに結びついている。

そこで二つ目に、上位のイデア的客観性として、表現レベルの「語」ではなく、「志向的内容」「意味の統一性」があげられる。同一の内容がさまざまな国語で思念されることができ、意味のイデア的同一性が翻訳の可能性を保証し(62/93)、これはあらゆる事実的な言語的主観性から解放されている。

しかし、このとき「対象」そのもの(たとえば現実のライオン)は意味の表現でも内容でもなく、

自然的、偶然的実在である。直接的に現前する感性的事象の知覚が意味のイデア性を基礎づけているので、これは経験的主観性、偶然性、事実性によって「縛られた」イデア性であり、そこから「自由」ではない(63/94)。

これに対して幾何学のイデアの客観性は絶対的である。これが第三のイデア性、対象そのもののイデア性であり、実在的偶然性の一切を離れている(64/94)。

ここでデリダが援用するのは、フッサールが『経験と判断』でいう「縛られた」イデア性と、自由なイデア性という区別であり、この「縛られて」いる度合いによって三段階がもうけられている。このように比較してみると、デリダの区分における二番目の段階、すなわち「志向的内容」「意味の統一性」のイデア性は、フッサールが明確に分離していなかったものであり、デリダが付け加えた、あるいは明確化したものであることがわかる。この、特定の言語による限定を離れた意味のイデア性は、フッサールの普遍言語という概念に相関する。

フッサールによれば、「人間性一般」の地平には「普遍的言語」が属している(182/268)。人間性は「直接のおよび間接的言語共同体」であり、言語とその記録によってのみ、「人間性の地平」は「開かれて限りない地平」である。ただしこのとき「成人の正常な人間性」が想定されるのであり、「異常者や幼児の世界はこれから除かれる」。人類は各人にとって「われわれ」という地平をなし、「正常な仕方互いに十分理解しつつ語り合える能力の共同体」であり、この共同体の中で、誰でもその人間的環境の中にあるすべてのものを、客観的に存在するものとして語ることができる。「すべてのものはその名前を持っており」「あるいは名付ける、言語的に表現しうる」ものである。客観的世界とはすべての人にとっての世界であり、「この世界の客観的存在は自らの普遍的言語を持つものとしての人間を前提している」(183/269)。それゆえ、イデアの客観性は、いかなる言語で表現されようとも、ただ一度しか存在せず、原語においても翻訳においても同一である。

ここでフッサールには、各言語において同一の意味が共有され、伝達されうるという普遍的な翻訳可能性を保証する「普遍言語」「純粋な言語活動」の想定があり、デリダはここにいくつかの問題点を指摘している。

- 1 まず、フッサールにおいて「正常な成人」の人間性が「人間性の地平ならびに言語共同体として」「特権化される」。しかしこの「成人性と正常性」(74/114)の本質規定が困難であり、これはむしろ「規範」による排除を伴うことになる。
- 2 フッサールは、すべての人が、異なった言語間でも翻訳によって同一の意味を共有、伝達しうるような「普遍的言語活動」を想定している。これはまず「純粋文法」と、「アプリアリな規範」にまつわる困難を抱えている(75/115)が、それだけではなく、「すべてのもの」が「命名可能」すなわち「言語的に表現可能」であることを前提している。つまり言語の相違に先立って、文化以前の「同一の自然的存在者を眼前にしうる」ことが、「伝達の第一次的基礎」とされ、文化は還元可能なものとされるのである。

「しかし、文化以前の純粋な自然はいつもすでに埋没してしまっており、「一種の接近不可能な下部理念的なものである」。するとフッサールのいうのとは逆に「非伝達と誤解とは、文化と言

語の地平そのものではないだろうか」(77/117)。特に、「意味内容が客観的感性的存在者のモデルに、直接的にせよ間接的にせよもはや引き戻され得なくなると」、「絶対的翻訳可能性」は不可能になる。「言語のモデルは、フッサールにとっては、科学の客観的言語である」。「その意味が客観ではないような詩的言語は、彼の目から見れば、決して超越論的価値をもたないであろう」。それだけではなく、この言語モデルによれば、そもそもフッサール現象学の中核にある「経験的ならびに超越論的主観性一般」は、「直接的で一義的かつ厳密な言語」にとっては接近不可能にならざるを得ないことになる(77/117)。

- 3 世界が「言語で表現できるものとしての諸客観の全領域」といわれるとき、現象学にも残存する空間の特権と、「客観主義的」傾向が指摘しうる(78/119)。

ここでのフッサールは言語を物の「名前」とする言語観に立っている。言語に先立って、世界のなかに名指されるべき客観が自存している、とされ、これによって言語間の翻訳可能性が保証される。これに対して、『グラマトロジーについて』でデリダが援用しつつ批判したソシュール以後の言語学の知見は、このような言語観を否定するものであった。つまり、言語において語の分節と意味の分節は相関しており、世界内の客観もまた言語によって初めて分節され、客観としての同一性を得るのである。すると、歴史的、事実的な個別的な言語による分節以前の、普遍的な意味のイデア的同一性を想定することは困難である。ここでのデリダはまだこの言語観自体については立ち入っていない。この言語観は、フッサールにおける、対象の意味が言語表現に先立って既に自存する、という「前表現的意味」の想定と連関している。デリダは、この後「形式と意味作用」などにおいて「前表現的意味」の想定を批判している。

この点には立ち入らないとしても、デリダの明確化した、第二段階のイデア性、すなわち個別的な言語を越えた志向的な意味のイデア性は、フッサールの普遍言語の想定から導きだされたものである。そしてこの普遍言語の成立可能性については、デリダは困難、というよりほぼ不可能なものとなししている。つまり、この第二段階のイデア性を、それ自体不可能なものとなししながら導入したことになる。

### 3 イデア性の構成

幾何学的対象のイデア的客観性は言語的形象のイデア的客観性とは区別され、ここにはデリダによれば「自由な」イデア性と「縛られた」イデア性という区別がある。にもかかわらず、このイデア性が客観性を受け取るのは、「言語的受肉」によって(69/110)である。

フッサールによれば、「始まり」において「発見者の主観のなか」の「本源的に現存する意味」については「最初の産出の顕在性、根源的「明証」のうちにそれ自体根源的に現前することは、一般的に客観的現存を持ちうるいかなる永続的な成果も生み出さない」(184/270)。最初の根源的明証は、何ら客観性、イデア性をもたらさない。本人の想起における「合致」によってはじめて、「いま本源的に実現されたものは以前に明証的だったものと同一の事象だ」という「同一性の明証」が生

じる(184/270)。『内的時間意識の現象学』において、フッサールは、過去把持には根源的明証性を認めているが、想起には認めていない。根源的明証性の領域を離れ、そこから疎外された反復においてのみ、アイデアの対象の同一性が構成される。デリダによれば「意味は、他の主観にとってそうである以前に、同じ主観の別の契機(瞬間)にとって同一な対象のアイデア性である」(82/120)。しかしこれだけでは、「われわれは、主観とその主観的明証的能力を踏み越えておらず、したがってまだいかなる客観性も与えていない」(185/271)。

そこで問題は、いかにして言語の媒介、「言語的受肉」によって、「単に主観内部的でしかない形成物」が(181/266)「そのアイデア性において客観的に」なるのか(183/269)である。「心理内部的に構成された形成物」が、「まったく心理的実在ではない」「アイデア的客観性」としての「間主観的存在」に達する(184/270)。それは「感情移入の共同体と言語の共同体としての共-人間性」によってである(185/271)。「言語による相互理解の結びつきの中で、一人の主観だけの根源的産出とその所産は、他の主観たちによって能動的に追理解される」(185/271)。想起の場合と同様に、他者によって産出されたものの追理解の場合にも「現前化する能動性の共-働」が起こり、コミュニケーションの双方の側で「精神的形成物の同一性」についての「明証的な意識」が生じ、これらの反復の理解の連鎖を通して「明証は同じままで、他者の意識の中へ入り込んでゆく」。「反復的に産出された形成物」は、「普遍的な唯一の形成物」として意識される(185/271)。

ここでは言語の「縛られた」アイデア性から引き離された幾何学の絶対的なアイデア的客観性が、再び事実的な言語共同体に結びつけられているが、デリダによれば、むしろ「この言語への回帰は文化および歴史一般への還帰として、還元そのものの企図を最終的完成にもたらずのだ」(70/111)。逆説的なことに、「意味のアイデア的純粋さを譲り渡す」ような事実的な言語と歴史への「再降下」がなければ、意味が、創建者の心理学的主観性のうちに閉じ込められたままであり、「歴史的受肉化」は、「超越論的なものを縛るのではなく解放する」(71/112)。ここにある「権利論的、超越論的依存性」とは、幾何学的真理は、特定の言語や文化共同体の「特殊的事実的なすべての言語的拘束の彼方」にあるが、「この真理の客観性は、純粋な言語活動一般に含まれる報知の純粋な可能性がなければ、構成されえない」ことである。パロールは、既に対象であるものの表出ではなく、対象を構成する、「真理の具体的で権利論的条件」である(71/112)。「言語的アイデア性は、アイデアの対象が自らを沈積する場である」。「それは、共同的对象の産出、本来の所有者が所有権を奪われるような対象の産出である」(72/113)。このことは「超越論的間主観性が客観性の条件である」ことを告知する(73/114)。

しかし、口頭言語による伝達だけでは、未だ「アイデア的形象の客観性が完全に構成されたわけではない」。誰もそれを明証のうちに実現しなくなってもなお存続する「アイデア的客観」の現存が欠けている。そのためには、「文字に書かれ、記録された言語表現」が必要であり、その機能とは「直接間接の人格の話しかけを必要とせず伝達を可能にすること」「潜在的になった伝達であること」である(185-6/272)。

デリダによれば、対象が絶対的にアイデア的であるためには、「顕在的主観性一般との絆からの断

絶」が必要であり、口頭の言語では、個人的主観性から解放されても、「創建者の共同体の内部における結びつきの共時態」に縛られたままになる。「対象の絶対的伝統化、絶対的イデア的客観性、すなわち普遍的超越論的主観性に対するその関係の純粹性を保証するのは、エクリチュールの可能性である」(84/132)。エクリチュールは、意味を現実の主体にとっての顕在的明証および特定の共同体内部でのその顕在的流通から解放する。つまり、顕在的主体の不在によって、超越論的主観一般にとっての権利上の賦活可能性が生まれる(84/133)。

「イデア的客観性は、それが世界の中に刻まれない限り」、「完全には構成されない」のであり、「表記の中への受肉」はその内的完成の必須条件である(86/134)。デリダによれば、フッサールは、「言語による物体化」がイデア的客観性の存在意味にとって外的、偶然的であるとか、イデア的客観性が物体化の可能性に依存せずに完全に構成されているというわけではなく、「真理は、言われ、かつ書かれることができない限り、完全には客観的、すなわちイデア的であるわけではなく、誰にとっても理解可能で限りなく永続しうるものでもない」と主張している(87/135)。するとここには、「非空間時間性が意味に到来するのは、その言語的物体化可能性によってである」(88/136)という逆説的な事態がある。

この、エクリチュールによる絶対的客観性の構成については、いくつかの条件があるように見える。

それはまず、それが「万人にとっての客観性」に到達するためには、デリダの指摘するように、万人が言語の違いを越えて同一の意味を共有、伝達しうるような「普遍言語」の想定が必要になることである。そしてこの普遍言語の想定は不可能であるように見える。

さらに、文書による記録から根源的意味に到達するために、文書に「沈殿」している意味を「再活性化」する、主観の能力が想定される。この「沈殿」という事態は、それ自体比喻によってしか語られていない。この事態の意味する所と、それが前提とする、「生きた」ものと「死んだ」ものの対立が、さらに問われねばならないだろう。というのは、デリダ自身の議論も、この「再活性化」の可能性に依存しており、この「沈殿」は、ある意味でデリダの議論の根本概念である「痕跡」に引き継がれているからである。

#### 4 『声と現象』との関連

デリダが『声と現象』において彼が「現前性の形而上学」と呼ぶ現象学の脱構築を行うとき、彼の主要概念である「エクリチュール」を用いているが、これがフッサールの『幾何学の起源』に構想を得たものであることは、彼自身の語る通りである。フッサールが歴史におけるイデア的対象の構成に必要なものとした書字(エクリチュール)を、デリダは言語の意味のイデア性の構成に導入した。

フッサールによれば、「根源的「明証」のうちにそれ自体根源的に現存することは、一般的に客観的現存を持ちうるいかなる永続的な成果も生み出さない」(184/270)。デリダが現象学を「現前性の形而上学」と呼ぶのは、意識にとっての意味の根源的な現前としての明証性が、究極的な根拠とされるからであるが、イデア的な客観性の構成のためには、この根源的明証たる対象の現前を離れ

た反復が必要である。アイデア性が獲得されるための「同一性の明証」が得られるためには、創筆者自身の意識にあっても、根源的明証を備えた「過去把持」ではなく、明証を欠いた「想起」における合致を必要とする(184/270)。この創筆者自身における反復について、事実的、現実的な共同体の言語が、それゆえ超越論的間主観性が導入されればならず、さらには内世界的で物質性を持ったエクリチュールが必要とされる。超越論的な意識にとってのアイデア的客観性を構成するものが、現実の内世界的、物質的な記号による反復であり、アイデア性の構成を可能にするものが意識の内部性を離れた外部になくてはならないという発想が、フッサール自身から得られている。

『声と現象』においてデリダは、フッサールが言語について「実在と表象＝再現前の根本的な区別」を適用していると考えている。これに対して「言語においては、表象＝再現前と実在を厳密に区別することは不可能である」(VP 54-55/112)ことを示すときに、この『幾何学の起源』から得られた反復の構造が適用されている。

言語において、さらには記号一般において、シニフィアン一般、音素や書記素は、「ある種の形式的同一性において反復され、識別されるのでなければ一般的に記号として、また言語として機能しえない。この同一性は必然的にアイデア的である」。フッサールによれば言説の構造とはアイデア性であり、それはシニフィアンのアイデア性、シニフィエのアイデア性、さらには対象のアイデア性である。「このアイデア性は、反復作用の可能性に全面的に依存し、これによって構成されているのである」。それゆえ、アイデア的对象に関しては、現前化は再現前化の可能性に依存し、「反復から現在の現前性を派生させるのであって、その逆ではない」(58/118-9)。それゆえ言語を構成するアイデア的对象に関しては、そのアイデア性は反復可能性によって構成されているので、その「実在」あるいは「現前」はすでに表象＝再現前によって構成されている。それゆえ言語に関して、「表象＝再現前と実在を厳密に区別することは不可能」なのである。

この、アイデア性の構成を反復に求める議論は、『幾何学の起源』から得られたものである。ここでも、いくつかの異同を指摘しておくことによって、今後の考察のための糸口としておきたい。

『幾何学の起源』は、言語的なアイデア的客観性とは区別された、いわば絶対的なアイデア性を備えた、幾何学的対象のアイデア的客観性の、言語による構成を扱うものであった。この議論を、デリダは言語のアイデア的意味の構成に転用したことになる。この二つの次元の距離は、どのように考えるべきだろうか。

また、このアイデア性の構成は、歴史的、間主観的な発生のプロセスである。すると、この歴史性、間主観性の次元は、各人の使用する言語の意味のアイデア性の構成においては、どこに置き入れられるべきであろうか。これらの点についての考察は、機を改めたい。

- ・引用した著作を次の略号で示し、原著と訳書の頁数を示した。  
OG:Edmund Husserl,*L'origine de la géométrie*, traduction et introduction par Jacques Derrida, 4.ed., 1995, PUF. 田島、矢島、鈴木訳『幾何学の起源』青土社。  
VP:Jacques Derrida,*La voix et le phénomène*, 4.ed., 2010, PUF 林訳『声と現象』ちくま学芸文庫。  
SP: Jacques Derrida,*Sur parole*, Aube, 1999. 林、森本、本間訳『言葉にのって』ちくま学芸文庫。  
注1) ルドルフ・ベルネット「デリダ、師の声を聴く」カトリーヌ・マラブー編『デリダと肯定の思想』高橋、増田、高桑監訳、未来社、51頁。